

“My poor, lame, feeble dog!”

『オーロラ・フロイド』における犬、ドメスティック・イデオロギー

越智友里絵

メアリ・エリザベス・ブラッドンの『オーロラ・フロイド』において飼い犬バウワウ、殺人を察知する犬、犬売り人マシュー・ハリソンなど犬は積極的に登場する。先行研究においてケイト・ワトソンは犬が殺人動機を齎すと言及している。一方マーレーン・トロンプは、オーロラとバウワウを同一視した上で使用人による犬への攻撃をヒロインへの攻撃と結びつけている。これらの指摘は重要ではあるが、小説が提示する共感による人間と動物の結びつきを見逃している。本研究発表では初めにヴィクトリア朝期における動物、歴史的背景、同時代小説を確認する。アイバン・クレイルカンブ、ケリディアナ・シェッツの人工義肢(prosthesis)、人工義肢的犬(prosthetic dog)という概念に依拠しながら、オーロラの飼い犬バウワウが人工義肢的犬(prosthetic dog)であり、鞭打ちの場面を人工義肢から切り離された使用者として再考する。

ハリエット・リトヴォはイギリスにおける動物の立場の変化を次のように説明している。19世紀以前は動物に対して死刑を求刑する事例などが散見され、動物は責任能力のある存在として捉えられていた。しかし、18世紀前半から19世紀後半になると人道主義の台頭に伴い、動物は刑事責任から解放されると共に、権利を剥奪され、責任は飼い主に問われるようになった。ジェイムズ・ターナーはヴィクトリア朝期の動物への関心を人間の精神性と結びつけ、19世紀英米人の精神に影響を与えた三つの変化のうち二つを人間が超自然的存在ではなく動物の子孫であるというパラダイムシフトと痛みへの恐れであると説明する。動物への関心の中心に位置していたのが犬であった。女王が愛犬家であったようにヴィクトリア朝では犬は愛玩動物として最大の人気を誇った。犬の特性として賢さと主人への忠誠心が謳われ、1854年前後にペットブームが花開くと、飼い慣らしやすい犬はブームの中心に位置した。その人気を表すかのように、1859年には世界初のドッグショーがニューキャッスルで執り行われた。

昨今ヴィクトリア朝における犬と人間の関係は人工義肢と使用者という視点から検討されている。クレイルカンブはヴィクトリア朝が人工義肢の時代であるという着想に影響を受け、動物さえ人工義肢のように人間により使用されていると問いかける。人工義肢的な動物の例として、飼い慣らされた動物が挙げられている。ここではウールや皮など、直接的に動物が道具へと変換される過程に思考を限定せず、家畜さえ人間の欲望に基づき変換された人工義肢であると包括的に捉えられている。さらにクレイルカンブは犬などの動物との結びつきは人間としてのアイデンティティを定義、構築にも繋がるに加え、ペットの犬さえ飼い主の人工義肢であり、人間の非動物性を定義することができるという。ハーディ作『遙か群衆を離れて』において疲労困憊のファニーに寄り添う犬はprosthetic dogの一例であり、友情の下動物と人間が協力的に結合する関係(40)と定義されている。シェッツは犬がファニーの「感情的人工義肢“emotional prosthesis”」(17)であると呼ぶ。

シェッツは人工義肢の役割を“togethering”—使用者と人工義肢の接続—と規定した上で、prosthetic dogは身体・感情的に主人を支えると述べる。『オーロラ・フロイド』においてバウワウは身体的接触を通してオーロラを心理的に補強する。両者の身体的近接性は彼らが共に馬車へ乗車し、余暇時間やMorning Visitの最中々々身体への接触を図ることからも明らかである。シェッツの「感情的人工義肢“emotional prosthesis”」(17)としての犬の姿も本作品には提示されている。感情的人工義肢とは使用者を心理的に支える有機物・無機物を指す。飼い犬が感情的人工義肢として主人を補強する様子は、ヒロインの心理的負荷が高い状況で散見される。自己喪失したオーロラが療養する間バウワウは彼女の足元のクッションに前足を置き、彼女の回復を助ける。重婚が露呈し思い悩むオーロラの傍に寄り添う姿も描かれている。飼い犬が主人に寄り添い心理的補強を行う他に、主人の心理を察知し主体的に行動する様子も見受けられる。飼い犬(・飼い馬)とヒロインは共感を基盤とした非言語コミュニケーション “How marvellous is the sympathy which exists between some people and the brute creation! I think that horses and dogs understood every word that Aurora said to them” (AF 49)を実践している。バウワウはオーロラが危機に瀕した際彼女の心情を察知し威嚇を通じて彼女を精神的に支えている。オーロラが憎むスティーブの顔を目にしたバウワウは、窓に向かって唸り声を上げて立ち上がり、彼に向かって飛びかかろうとする。バウワウはオーロラの動揺を察知し、スティーブに向かって威嚇することで、彼女を危険から守ろうとする。

これまで prosthetic dog であるパウワウが感情的人工義肢としてヒロインを補強する様子に着目した。一方、作品では prosthetic dog の一時的喪失も描かれている。使用人ステューブは馬具一式を馬小屋へ運ぶ最中に、パウワウを鉄付きの木靴で蹴り飛ばす。犬の叫び声を耳にしたオーロラは怒りに身を任せ使用人を激しく鞭で打ち付ける。

Aurora sprang upon him like a beautiful tigress, and catching the collar of his fustian jacket in her slight hands, rooted him to the spot upon which he stood. The grasp of those slender hands, convulsed by passion, was not to be easily shaken off; and Steeve Hargraves, taken completely off his guard, stared aghast at his assailant. Taller than the stable-man by a foot and a half, she towered above him, her cheeks white with rage, her eyes flashing fury, her hat fallen off, and her black hair tumbling about her shoulders, sublime in her passion. (AF 138)

感情的人工義肢であるパウワウが痛めつけられ、心理的補強物を失ったオーロラは感情を抑制することができず、衝動的な行動を取る。ゴルハンが男女ともに感情の自制が重視され、激しい感情の表出は好ましくない (2) と説明する通り、19 世紀において感情の自制が社会通念だった。またジョン・メリッシュがステューブへ鞭打ちは夫の役目であると話す通り、鞭打ちは家長の役割あり、ヒロインは感情を乱し鞭打ちを行うことで社会・性規範から反している。また人工義肢が損傷し保有者と切り離されることで、使用者の人間性の確立が阻害されてしまう。クレイルキャンプは、ヴィクトリア朝社会において、動物を義肢や道具として使用する行為は、人間の非動物性を再定義するためであると説明している。換言すると、人工義肢である動物から切り離されると人間と動物との境界線が崩れてしまう。人工義肢が切り離されたオーロラは人間性を確立することができず、語り手によって「美しい虎」と形容される。ヴィクトリア朝で虎が美しく危険で反抗的な従属者であるという着想(Ritvo 42)に由来しており、虎というイメージは夫の庇護下に属す妻という従属的立場でありながら女性性や社会的な規範に反した行動を取るヒロインの姿が効果的に強調している。

クレイルキャンプ、シェッツの人工義肢という概念に依拠し、オーロラの飼い犬パウワウが prosthetic dog として働いていることを明らかにした。両者は言語を超えた共感によって会話し、prosthetic dog であるパウワウは身体への接触を通しオーロラの意味を汲み取り代弁、威嚇することで、彼女を身体的・精神的に支える。パウワウがステューブによって傷つけられ、prosthetic dog を失ったオーロラは衝動的に振る舞い、人間性を喪失する。

サラ・アマトは、ヴィクトリア朝における飼い犬とジェンダーについて男性は犬と主従関係を結ぶ一方、女性は犬に守られ、主従関係を維持できない(79)と指摘する。パウワウは忠誠心の高く従順な犬と形容される通り支配関係を崩そうとしない。両者は確固とした主従関係で結ばれており、アマトが規定する二項対立に収まることはない。これまでリン・パイケットを筆頭に、メアリ・エリザベス・ブラッドン作品のヒロイン像における理想的女性性への異議申し立てが論じられていたが、犬とヒロインの関係性においてもブラッドンのドメスティック・イデオロギーへの抵抗が見受けられるのではないだろうか。

引用文献

Amato, Sarah. *Beastly Possessions: Animals in Victorian Consumer Culture*. U of Toronto P, 2015.

Braddon, Mary Elizabeth. *Aurora Floyd*. Edited by P. D. Edwards, Oxford UP, 2008.

Chez, Keridiana W. *Victorian Dogs, Victorian Men: Affect and Animals in Nineteenth-Century Literature and Culture*. Ohio State UP, 2017.

Gorham, Deborah. *The Victorian Girl and the Feminine Ideal*. London: Croom Helm, 1982.

Hardy, Thomas. *Far From the Madding Crowd*. Edited by Suzanne B. Falck-Yi, Oxford UP, 2008.

Kreilkamp, Ivan. "Anthroprosthesis, or Prosthetic Dogs." *Victorian Review*, vol. 35, no. 2, 2009, pp. 36–41.

Mangham Andrew. *Violent Women and Sensation Fiction: Crime, Medicine and Victorian Popular Culture*. Palgrave Macmillan, 2007.

Pykett, Lyn. *The Nineteenth-Century Sensation Novel*. Northcote House Publishers, 2011.

———. *The "Improper" Feminine: The Women's Sensation Novel and the New Woman Writing*. Routledge, 1992.

Ritvo, Harriet. *The Animal Estate: The English and Other Creatures in the Victorian Age*. Harvard UP, 1987.

Tromp, Marlene. *The Private Rod: Marital Violence, Sensation, and the Law in Victorian Britain*. UP of Virginia, 2000.

Turner James. *Reckoning with the Beast: Animals, Pain, and Humanity in the Victorian Mind*. Johns Hopkins UP, 1980.

Watson Kate. "The Hounds of Fortune: Dog Detection in the Nineteenth Century." *Clues*, vol. 29, no. 1, 2011, pp. 16–25.